

人間関係づくりの構築を目指した生徒への取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、他者と関わるのが苦手であり、中学校 3 年生の 4 月以降、教室に入れない状況が続いたため、当該生徒・保護者と担任、コーディネーターで面談を継続するとともに、校内別室への登校、家庭訪問、外部機関との連携などの支援に取り組んだ。

具体的な取組

○居場所づくり

校内別室では、教室に入ることができない生徒に対し、「一日の過ごし方を決める」、「個別学習に取り組む」、「小集団で学習に取り組む」、「(週末は) 掃除の時間」などの支援を行っている。

支援員だけでなく、学年教員、不登校対応巡回教員も当該生徒と対話し、生徒理解を深めている。



○外部機関との連携

当該生徒は、教育支援センターと連携を取り、週 1 日通所している。社会的自立に向けた取組を主として、教科の学習、進路学習、校外学習などに参加している。

また、SSWとも連携し、当該生徒・家庭と医療・福祉をつなぎ、必要に応じた支援を行っている。

○絆づくり

校内別室での小集団で取り組む場面では、それぞれの生徒の要望をもちより、生徒たちで取り組む内容を決めている。決め方など偏りが出ない工夫もしている。生徒同士の気持ちを表現できる場、考える場、認め合える場などを設定している。



○家庭訪問の実施

欠席が続く場合、保護者と連絡を取り、生徒に無理のないよう調整し、家庭訪問を実施した。配布物や同級生からの励ましのメッセージカードなどをまとめ、手渡している。外出できる時は、一緒に近隣を散策し、悩み事や困り事等を聞き、当該生徒、保護者、学校で情報共有している。

成果

当該生徒は、家庭・教員・支援員・教育支援室の連携で少しずつ学習に興味をもち、校内別室でできた仲間と過ごす楽しみを理解することができた。

課題

過去の出来事を思い出し、休むことがあった。SC・医療との連携など心理面での支援を継続していく。

継続的に登校できる環境作りについて

不登校生徒の状況

対象生徒は、令和5年9月から不登校となった。小学生の頃から体調不良を理由とした欠席が多かったが、漠然とした心理的な理由を訴えて欠席するようになった。その後、令和6年6月から校内別室を利用し始め、週1、2回の頻度で継続的に登校し、教科の学習をしたり、教職員と話をしていたりしている。

具体的な取組

○興味のある教科の学習

当該生徒は、教科の講師でもある校内別室指導支援員と共に、興味のある学習に、時間一杯、集中して取り組んでいる。在籍学級の生徒と同じ学習や作業に取り組むことで、他生徒の成果物の良いところを取り入れるなど、間接的な関わりにもつなげている。

○ICTを活用した連絡

学習管理アプリ内に、当該生徒と学級担任、校内別室指導支援員等のグループを作り、教職員から連絡事項を配信したり、当該生徒からの質問を教職員が受けたりすることができるようにしている。当該生徒にとって心理的ハードルが低く、気軽に連絡ができる状況をつくっている。

○特別な授業・行事への参加

当該生徒は、「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」の一環として行われた、ジャズバンドの生演奏を聴く授業に参加した。特別な授業や行事の際に声をかけ、参加できる活動を増やせるようにしている。



○災害時の動きについての確認

当該生徒の登校時間が限られており、避難訓練に参加するのが難しい。校内別室を使用している際の安全な避難について、特別支援校内委員会にて検討し、まとめ、当該生徒と校内別室支援指導員とで災害時の動きの確認を行うとともに、災害について考える機会とした。

成果

月1日程度登校していた生徒が、校内別室の利用開始から、週1、2日登校するようになった。教職員との関わりの中で、社会性が育まれている。また、表情も徐々に柔らかくなり、校内別室を居場所と感じている様子も見られる。

課題

興味の低い学習を予定している日に欠席することが多いが、進路を考え、自分にとって必要なことに取り組める力を育むようにする。

心のケアと学習補助の充実による教室復帰を目指した校内別室の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校入学から5月連休までは通常どおり登校していたが、連休明けから教室に入ると涙が出るようになり、教室に入れなくなった。行事の取組の開始時期に復帰のきっかけを模索しているが、教室復帰には至っていない。学習意欲はあり、実技教科等から参加できるように準備を進めている。

具体的な取組

○校内別室の日誌による担任を中心とした教員との関わり

その日に何をしたのか担任に伝えること、提出物の受け渡しなど、日誌を通してコミュニケーションを図っている。登下校時に職員室で日誌の受け渡しを行うため、担任以外の教員と関わる機会としても日誌を運用している。

○オンライン授業による学習補助

毎日、その日の授業配信時間割の中から、当該生徒が自ら選択し視聴することができる環境を整えている。教室復帰を果たした際に、授業の進度に追いつけないことで再び不登校になることを防ぐため、自習とオンライン授業配信を併用する支援を行っている。

○週1回のカウンセリングによる心のケアと自己理解

毎週月曜日、SCとのカウンセリングを設定し、最近の様子を中心にメンタルケアを行っている。行事前には、参加の意思確認やそれに伴う不安などを話すこともある。話をすることで、自己の状況を把握することにもつながっている。

○技術・家庭科の個別からの教室復帰へ

技術・家庭科担当の空き時間を活用し、作品制作の個別指導対応を行っている。全学年の不登校生徒を対象に行い、同じ空間で複数人が作業することで、教室で授業を受ける環境に近い状況をつくり、教室復帰への足がかりとしている。



成果

学習の個別対応によって、学習の機会を確保し、学習の遅れに不安を抱える生徒にとって、教室復帰に向けた不安の軽減につながった。また、多くの教職員と関わる機会をつくることで、教室復帰後も安心して話すことができる関係を構築することができた。

課題

学習意欲や学力の低い生徒への学習支援、別室生徒以外との関わりが少ない生徒への支援が課題である。

校内別室の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の後半から教室に入ることを拒むようになった。1 年生の頃は、職員室や保健室で過ごすことが多かった。令和 5 年度から校内別室を設置し、毎日、自分で登校することができるようになった。令和 6 年度は、週 2 日、給食も食べることができるようになった。

具体的な取組

○不登校生徒の居場所の提供

校内別室を週 5 日運営している。毎朝、出席の確認を行い、今日の予定を確認している。担任も顔を出し、朝の挨拶を行っている。教科担当から授業のプリントの説明を受け、提出物の確認を行っている。

○組織力の向上

加配教員と校内別室指導支援員を中心に、別室指導の充実を図っている。別室での様子は、担任や学年の教員にその日のうちに報告している。より多くの職員が別室指導に関われるよう、情報共有を密に行っている。

○校内委員会の充実

毎週火曜日に校内委員会（管理職、各学年の特別支援担当、加配教員、特別支援教室担当教員、養護教諭、校内別室指導支援員、SC、SSW）を開き、情報共有を行っている。学年ごとに生徒の変化や支援方法、今後の動き等を把握し、学校全体での支援体制を確認している。

○個に応じた指導

曜日に応じて、特別支援教室での授業や別室での自習と、個に応じた支援をしている。週 2 日は、4 時間目まで別室で過ごし、給食を食べた後に下校している。常に当該生徒に寄り添い、安心して過ごせるような体制をとっている。



成果

別室という居場所で、毎朝、支援員が迎え入れることにより、安心して登校できるようになった。週 2 日は、給食まで学習し、長い時間学校にいらることができるようになった。表情も明るくなり、自分から声をかけることが増えてきた。

課題

学習に対する意欲を向上させることが課題である。給食まで学習し、別室で過ごす日数を増やしていけるようにしていく。

特別支援校内委員会を中心とした別室利用の取組について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 6 月頃から休み始めた。入学当初からなかなかクラスになじめずにいた。この状況から、家庭は当該生徒を朝から学校に登校するよう促すが、教室に入ることができない日が続き、保健室等で過ごすことがあった。

具体的な取組

○チーム学校

特別支援コーディネーターを中心に、校長・副校長・各学年代表・特別支援教室担当・特別支援専門員・SC・SSW・別室指導員・不登校対応巡回教員の組織で、教育的支援が必要な生徒の情報交換をし、未然防止、早期発見、対応、生徒理解をそれぞれの立場から報告する。具体的支援の検討会議を行っている。

○居場所の提供・友達との関わりの設定

校内別室を設置し、教室に入ることができない生徒の支援を行っている。

この取組は、生徒 1 人に対して支援員 1 人であり、当該生徒への支援を十分に行うことができている。また、別室での様子を生徒が所属する学年の教員と話す機会を設けている。

○部活動との連携

所属していた部活動には仲の良い友達がいて、部活動にだけは参加できる状態であった。部活動顧問や別室支援員が連携して部活動のある日の午後は別室登校をするようにした。

○教育支援センターとの連携

別室の教職員との対応ではなく、中学生同士の交流もできるように、教育支援センターの通所も開始した。



成果

当該生徒・家庭・教員・支援員・教育支援室の連携で部活動や別室、教育支援室などクラス以外の居場所を複数もつことで、安心して過ごせる時間と場所の確保ができた。

課題

特定の友人との関わりしかまだできていない。少しずつ関わりをもつ友人を増やすような取組が必要である。

不登校生徒の居場所の設定について

不登校生徒の状況

対象生徒は、集団生活への不安や生活リズムを整えられないなどの理由から、教室に入ることが難しい状況が1学期半ばから見られるようになった。そのような中、校内別室が設置されたことで、当該生徒が自分のペースで登校し、安心して過ごせる居場所として、少しずつ登校する日が増えてきた。



具体的な取組

○工夫したプログラムの設定

朝からの登校が難しい生徒が多いため、校内別室では、4時間目・給食・5、6時間目を過ごすプログラムを支援員が中心となり設定している。具体的には、「集中タイム」と「リラックスタイム」を設け、集中タイムでは、個々の状況に応じた学習を進め、リラックスタイムでは塗り絵や手芸、ゲームなどといったSSTに取り組み、生徒同士が互いを理解し、興味・関心をもてるような工夫をしている。

○生徒のペースで進める学習支援

当該生徒は、集団生活への不安感が大きく、一年の後半から休みがちであったが、校内別室に週2日のペースで登校できるようになった。校内別室では、自分のペースで学習を進め、他者との関わりを通して少しずつ自分の気持ちを表現できるようになってきた。在籍学級の授業にも関心をもち、オンライン授業を受けられる場合がある。

○保護者との連携

当該生徒は、家庭の影響があり、小学校高学年から登校が難しい状況が続いている。そこで、保護者との連携を深め、支援体制を整え別室登校を勧めたところ、少しずつ登校できるようになった。

○静かで落ち着いた学習環境

当該生徒は、周囲の音や何気ない言動が気になるなどの理由で集団生活になじめず、登校が難しくなった。静かに落ち着いて過ごせる居場所ができたことで、登校の回数が増え、それに伴い、保護者の子育てに関する不安感が軽減されてきた。

成果

様々な不安を抱えている生徒が安心して過ごせる場所が校内にあることで、定期的に登校できるようになった生徒が増えた。SCも校内別室を利用する生徒に関わり、メンタル面のケアを行っているため、生徒の不安の軽減につながっている。

課題

専用の教室を設置し、支援員を複数にするなど、常時開室する体制を整え、生徒の実態に合った支援を可能にすること。